



落花に寄せて

秋山 加代



私は鎌倉で生まれましたが、関東大震災のち東京に移り、現在の品川区で育ちました。当時の町名は、府下荏原郡北品川宿御殿山と云い、郊外に新しく開けた感じでした。いまは車の往來の繁しい道路です。

御殿山は江戸時代有名な桜の名所で、その名残りか、どこの家にも桜や松の大木がありました。私の家にも、不相応に大きな松が枝を張って居り、父は書斎の日当りがわるいと言っていました。

桜は無いのに両隣りからの花吹雪が、家の庭にも散り敷きました。毎年、落花の頃になると、父は庭を眺めながら誰か家の梢はなれて今日もまた

花なき庭に花の散るらむ

という歌を口ずさみました。誰の作か忘れましたが、父は歌や詩が大好きで、自分の心にひびくものは、万葉であれ、古今であれ、身内の者の作であれ、よく口にしました。

私もその影響か、何かにつけて詩歌を思い出す癖があります。新幹線の中から、山の中に咲く桜を見ると、蕪村の

さびしさに花咲きぬめり山桜

という句が、口にのぼってきます。この句は、ロンドンに居た頃、父が送ってくれた、佐藤春夫の「美の世界」という本にありました。孤独な花の美しさを感じます。

毎年、京都の花を見に行きますが、今年には河内長野という処に、筋無力症というむつかしい病気で、車椅子の生活をしている青年、渡辺剛さん一家を訪ねました。

両親、姉との四人暮らし。三歳で発

病し、宣告された命数を、もう七年も超えしました。家中で、その事をよろこびながら、充実して生活していられます。私の書いた文章が、お母さんの眼にとまって以来の文通でしたが、昨年この一家が、車椅子のままの剛さんを連れて、電車をのりついで私を訪ねて来られて以来、剛さんは私を「東京のお母ちゃん」と呼ぶようになりました。

ぜひ、新しい二階に泊ってほしい、と招かれました。剛さんに名前の由来の金剛山を見せたいと、お父さんが手づくりされた二階です。長年のお勤めをやめて剛さんに専念されるお父さんは、まるでスイスの山小屋のような瀟洒な部屋を作り上げ、剛さん用の素朴なエレベーターもつけました。

その部屋に泊めていただきました。窓から金剛山を眺めていたら、どこからか桜の花びらが飛んで来ました。ふと父を思いました。

皆で弘川寺に行きました。「願はくは花の下にて春死なむ」の西行の終焉の寺です。剛さんの車椅子を、お寺の縁側に入れて、山の桜を皆で見ました。南側の庭も、北側の庭も、風が吹くたび盛大な花吹雪。そのたびに剛さんの車椅子を動かして、皆で黙って落花を見ました。心がしんと静まる夕暮の落花の風情でした。

剛さんはこの春、車椅子のまま桃山大学を卒業しました。グリー・クラブ

も楽しんで。寝返りさえも家族の手を借りる剛さんを、大学へ送り迎えた家族の、さりげない大事業。しかもお母様もお姉様も仕事を持っています。こうして卒業した剛さんの、卒業祝いの夕食に、私も招いていただきました。食事のあと、大阪駅で別れ、私は頭を何かで叩かれたほど、感動して新幹線に乗りました。

帰京してから剛さんの、苦心のワープロの手紙が届きました。生まれて初めて俳句、

花びらの舞いて明るき古寺の庭がしるしてありました。

すなおな心で、自分の運命を受けとめながら、いつも明るい剛さんらしい句です。読んでいてあの夕暮の花吹雪、人と人との出会いの不思議さ、を思いました。

この文章を書け、と言われた八木健三先生とも、旅先のおとした出会いがきっかけで、ご縁が来ました。花のことを書くつもりが、はかり知れない人の出会いの話になりました。

秋山加代（あきやま かよ）

一九二二年小泉信三の長女として鎌倉に生る。聖心女子学院同専門専門学校卒業。妹タエと「父小泉信三」を著す。現在「わたしの歌舞伎美論」連載執筆中。